

松本音楽院と才能教育

評反対！」と野次が飛んだのは閉口してしまった。大学院時代は、学資のためもあって、私自身で「霞ヶ丘ヴァイオリン教室」を主宰し、子供たちを教えたが、間もなく中国研究の方に本腰を入れなければならなくなってきたので、お茶の水の日仏会館で子供たちの発表会をやって教室を閉じた。

最近の想い出の一つは、あの文化大革命の激動期に中国を訪れたときのことである。上海の工業展覧会で中国製ヴァイオリンが展示してあったので、許可を求めて弾いてみたら、なかなか良い音をする。女子紅衛兵の服務員にピアノが弾ける人がいたので、彼女の伴奏で毛沢東讃歌の「東方紅」を即興で弾いたところ、黒山の紅衛兵から大きな拍手を浴びた。

一九六九年から七一年まで外務省特別研究員として香港に留学していたときには、ステイホルで小室内楽を演奏した。音楽に飢えている香港なのであろう、翌日の『ホンコン・スター』紙に写真入りで記事が出たので、またまた気恥かしくなってしまった。どうも、「私とヴァイオリン」は、気恥かしさの連続である。

清水幾太郎氏が最近の『朝日新聞』にテレビの「題名のない音楽会」を愛好されていることを書いておられた。音楽には全くの素人だと自称される清水先生は、昨年末の忘年会に是非私のヴァイオリンをと求められたのだが、やはり気恥かしさのあまりおことわりしてしまった。だが、「私とヴァイオリン」なんて書いてしまった以上、いつかは弾かねばならないと覚悟している。

——『文藝春秋』一九七四・三(巻頭随筆)

松本音楽院と才能教育

ここ数年、中国をめぐる内外の動きが大きな展開を示したためか、夏休みという私にとってのささやかな「特権」も十分に享受したためしかなかったが、今年は久しぶりに信州の夏を満喫することができた。

子供たちを連れて、松本の私の山荘の眼前の弘法山から生妻の池とその背後の山々をヤブを分けて歩いたりしたけれど、最近、前方後方墳が発見されて話題を呼んだ弘法山は、町中に育った私が幼時に近所の子供たちと「冒険」をしに行ったところであり、国民学校(小学校)三年生のときに終戦を迎えた私たちは、たしか一、二年生の頃、食糧のためのアカザの葉やオオバコを採りに登った山でもある。そんな想い出に彩られた松本の夏は、私にとってかけがえのないものだが、東京に戻る日はすぐにやってきた。

私のように国際関係論を講義したり、中国研究、それも現代中国研究に携わっていると、なにかと精神的にわずらわしいことも多い。そのような毎日のなかで、ヴァイオリンを手にし、手あ

かに汚れた楽譜をとり出して夢中で弾く時間は、信州の自然や郷里の友人・知人に囲まれているときのように私を喜ばせ、慰撫してくれる。

私にとってヴァイオリンは、今日、そのような意味をまず第一にもつのだが、そのような私が『文藝春秋』の本年三月号に「私とヴァイオリン」と題するエッセイを書くハメになったところ、多くの人びとから驚かれたり、うらやましがられたりした。

先日、数年ぶりに恩師の鈴木鎮一先生にお会いしたら、今もお元氣な鈴木先生は私の拙文をすでに読まれていて喜んでくださったので、いたく恐縮してしまった。私のような職業をもつ者のなかには、音楽愛好家や専門家はだしの音楽評論をぶつ者は多いけれども、自分で楽器を、それもヴァイオリンを弾く者は、やはり少ないようである。

今日では「スズキ・メソッド」として知られるヴァイオリンの才能教育が、全国に普及したためであろうか、最近の学生たちのオーケストラなどを聴いてみると、私の学生の頃に比べたら弦のレベルの高さは技術的には格段の差がある。今日ではわが国のヴァイオリン人口もピアノ人口も、幼時のお稽古事としては世界有数のものであるが、受験競争や管理社会での競争の激しさのためか、せっかくそのようにして幼時からヴァイオリンやピアノに親しんでも、それを持続させるのがなかなか困難であるようで、職業として音楽の道を選ぶ者以外は、まず最初は高校生の頃、次にはせいぜい大学生の頃までで終わってしまい、ひとたび中断すると、それまでの厳しい日課の反動のためでもあろう、すっかり生活から遠い存在になってしまふことが多いようである。

これは大変惜しいことであり、あえて大袈裟に表現すれば、一つの文化価値の内部的損失であ

るような気もする。このあたりの問題をどう考えてゆくのが、才能教育を受けた者の将来の職業選択の問題とともに、すでに四半世紀を過ぎて膨大な才能教育人口を世に送り出した才能教育の、今日の段階における一つの重要な問題点であるように思われる。

私とヴァイオリンとの出会いが私自身の成長のプロセスにどのようなハブニングをもたらしたかについては、右のエッセイで触れたのでここには繰り返さないが、私が初めてヴァイオリンを手にし、鈴木先生の門下に交わったのは、終戦直後の昭和二十二年初頭であった。それは信州に疎開された鈴木先生が戦後の荒廃の中で豊田耕児氏、山本恵子氏（故人）、小林健次氏らをわが國の将来を担うヴァイオリニストとして育てられる一方、声楽の森民樹先生、ピアノの鈴木静子先生、古池文子先生、ヴァイオリンの奥村・松井・有賀の諸先生など、中央・地方の音楽家や松本市の後援者の協力を得て市内下横田の木造二階建を借り受け、松本音楽院を創設されて間もなくのことであり、私はその数少ない一期生の一人であった。

今日では松本音楽院は才能教育会館となり、松本市民会館前のライラック広場脇に立派な音楽殿堂となつて、日本全国はもとより、世界各地からの留学生も集めているが、終戦直後の当時は楽譜にも不自由し、母がなれない手つきで夜通し写譜してくれたものである。毎年三月に東京の日本武道館で催される才能教育の全国大会は、子供たちの素晴らしい大合奏として人びとに感動を与えているが、このような成果は、今も下横田に残る松本音楽院の木造家屋から生まれたのであった*。

あの頃の松本音楽院は、環境こそ音楽の場にそぐわないものだったけれども、クリスマスのさ

さやかなパーティーでは皆でパッハのドッベルコンチェルトを合奏したり、私たちが「耕ちゃん、耕ちゃん」と呼んで親しんでいた豊田耕児氏が、ヴィタリーのシャコンヌやパッハの無伴奏ソナタを弾いて私たちに感銘を与えてくれた。豊田氏のような優れた天才が身近に存在したことは、音楽にたいしてはいかに情熱があろうとも、生半な才能と技術で音楽専門的な道を歩むべきではないことを早くから私に自覚させてくれたように思う。

こうして私は今、仕事の合い間にパッハやモーツァルトを復習し、わが子らにヴァイオリンの手ほどきをするのを、私の日常の愉しみに行っている。

——『信濃毎日新聞』一九七四・九・九（原題「松本音楽院のころ」）

*最近そこを通ったら、去年（一九九〇年）の夏にはあった旧松本音楽院の木造の建物はついに消失し、駐車場になってしまっていた。

椰子の実はどこから流れて来たのか

名も知らぬ遠き島より

流れ寄る椰子の実ひとつ

故郷の岸を離れて

汝はそも波に幾月

信州の文豪・島崎藤村の詞による「椰子の実」の歌は、日本人なら誰ひとり知らぬ者が無いほど広く親しまれている。愛知県渥美半島の先端・伊良湖岬は、藤村が詠んだ椰子の実が流れた場所としても知られていて、そこには記念碑まで建っている。「椰子の実」が全国に広まったのは、昭和十一年に当時のNHKラジオが東海林太郎の歌で「国民歌謡」として放送して以来であることも、古い世代の人びとなら御記憶であろう。

私のような戦後派もこの歌は大好きで、いかにも近代、よメロディが美しく、外国で生活